

始めの祈り 主の祈り

霊操の第 4 週は復活の週。

第 4 週の # 221 第 3 の準備

「望んでいるものを願うこと。ここでは、わが主キリストのこれほどの大きな栄光と喜びゆえに、
烈しい喜悦を覚えるため恵みを願う。」

私たちにとって、キリストの十字架を悲しむことよりも、復活の栄光を喜ぶことの方が難しいもの
です。

224 要点第 5

「友人どうしが普段はどのように慰め合うかに較べて、わが主キリストがもたらす務め、すなわ
ち、人を慰める務めを考察する。」

復活したキリストは、私たちの中で、教会の中で永遠に生きておられる。そして共同体の中で、私
たちを慰めてくださる。また他の人の慰める方を教えてくださる。そのことをエマオの弟子たちの
場面から黙想します。

エマオの弟子 (ルカ 24:13~35)

参考資料 イエズス会黙想会 --- マルティニー枢機卿指導 2000 年発行 訳: 松本紘一

1) イエスは慰める方

・イエスは生前に多くの方を慰めましたが、復活した後も弟子たち、友人、母マリアを慰めました。

そして、慰める方法を私たちに教えて下さる方です。

・イエスは慰める時に「頑張れ。悲しいことばかり考えていてはいけない。」と言うだけではありません。実際に、希望を与えて新しい道を歩める期待を抱かせてくれます。

・イエスの慰めは具体的です。言葉を投げかけるだけでなく、実際に慰めや希望を与え、新しい道を開いて下さる。一見暗く思えてもその先に光があるということを教えてくれる。

2 人の弟子を慰めるのに、イエスは 4 つのことをされます。①話を聞き ②ショックを与え ③神の計画を説明し ④最後にイエス自らが 2 人に奉仕しパンを割きます。

1 つ目 聞くこと

エマオへの道すがらイエスは 2 人が言うことを、ひたすら聞きます。初めから「私はここにいる。

私はイエスである。私は復活した。私を信じなさい。」とは言われません。

「何のことを話しているのですか。なぜ悲しんでいるのですか。どう思っているのですか。」と尋ねます。

慰めの第一歩は、口を挟まずただ聞くこと、相手から話しを引き出すことです。

「なぜ悲しく辛いのか話してごらんなさい。」とイエスは言われます。これは私たちにとって非常に大切なことです。なぜなら、2人がどんな思いでいるのか、2人が非常に複雑な状況にいることを自分たちに表現させるからです。

2人はイエスの生涯と死、そして婦人たちからの知らせも知っています。けれど、それらの持つ意味を理解できていません。

話すことによって落胆の思いを整理させていきます。他人を慰めようとする時に、とても大切なポイントです。自分たちの状況を自分たちで表現する機会を与えています。

2つ目 ショックを与える

慰めるためにショックを与えるイエス様のなさり方は衝撃的です。

「ああ物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちに言ったことすべてを信じられない者たち」(25 節)とされています。

常識では考えにくいなさり方です。慰めを求めて私たちのもとに来る人たちは、ただ自分たちの抱えていることや感じていることを認めて欲しいと思っていることが多いものです。けれども、考え方を改めてもらわないといけない時もあります。

相手は、「かわいそうに、どんなに辛いことでしょう。お気持ちは分りますよ。」と言ってもらいたがっています。けれど、「あなたは全体の状況が理解できていないのです。もし全体がわかったら

もう少し違ってくるはず。」と言わねばならない場合もあります。

嘆く相手に「その通りです。お気持ちはよく分りますから、あなたのためにお祈りします。」と言う方が簡単です。ショックを与えることは勇気のいることで、気がついてもなかなか言えないものです。けれども、考え方を変えないと事態を開きできないことがあります。イエスは大胆に切り込みました。

イエスは2人に最初に話を聞かれますが、続いて衝撃を与えます。この2点目は非常に重要です。

3つ目 説明をする

ショックを与えた後、イエスは神の計画（聖書）を説明されます。2人が知っていることは、神の計画の部分的なものでしかなく、全体がわかっていないことを教えます。十字架上の死は、イエスの失敗を表わすものではなく、神の計画に基づいていることを教えます。イエスが苦しみ、拒絶されたことは確かに事実です。しかし失敗と思われることが実は神の計画、イエスの勝利でした。イエスが苦しんだということは、預言者（特にイザヤ書52章の主の僕の第4の歌）たちが語った通り、メシアのしるしでした。

説明を受けた弟子たちの心に変化が生じます。イエスは知識を与えるだけでなく、2人の弟子の心を変えました。

2人は、「わたしたちの心は燃えていた」(33節)と言っています。話を聞いてもらい、ショックを受けましたが、神の計画がわかり、心が燃えます。不安や失望感から解放されてイエスの命を受けて心が燃え始めます。抱えていた重荷が軽くなって前に進めるようになります。

4つ目 奉仕する（パンを割く）

丁寧に神の計画（聖書）を説明した後、イエスは2人に奉仕してパンを裂きます。その時、2人は目の前の人が復活した主イエスだと悟ります。

イエスは「私は復活した主である。私はあなた方の前にいる。」とは言われません。自分たちで理解させます。ショックを与え、説明し、最後にミサを行うにとどめています。

パンを裂くことによって、最後の晩餐の場面を思い出させます。そして2人は目の前の人「自分たちに給仕して仕えてくれたイエス、復活したイエスだ」と悟ります。

この慰めのプロセスはとても感動的です。イグナチオが「イエスがどのように友人たちを慰めているか」(#224 第5要点)で言っていることを理解させてくれます。

この部分が、霊操全体の中でもとても大切な箇所です。

2) 謙遜なイエス

復活されたイエスは、分別を忘れず謙遜な方法で現れます。

イエスは復活したのち、13 回出現していますが、弟子たちに厳しい言葉を言っていません。慎ましく優しく現れています。弟子たちから苦しみを受けたことに少しも憤りを示していません。弟子たちが逃げたこと、イエスを否定したこと、イエスを見捨てたことを責めていません。

寛大な心で現れています。

イエスの言葉や出現には、友に見捨てられた悲しさは少しもありません。イエスは見捨てられたことを否定していません。けれどそのことに一言も触れていません。穏やかで柔和に、友に自分の栄光を喜んで欲しいと願っています。苦しみのことは考えていないかのようです。

イエスは復活された姿を現すのに脚光を浴びようとはしません。華々しい光を受けて姿を現そうとはされません。信じない人が愚かに思えるようには現れません。

復活されたイエスは神の計画のしるしを与えますが、強引に人々を信じさせるようなことはされません。私たちなら、これみよがしに姿を現すかもしれません。

復活のイエスは、信じる者にはしるしを示しますが、信じないではいられないようなされ方はされません。

イエスは信じる自由さを望んでいます。私たちの気持ちに反したことを押しつけようとはされません。私たちの自由を損なったりしません。むしろ私たちの自由を応援することを望んでいます。信じるに足るしるしは示されますが、私たちの自由を尊重して過度に示すことはされません。

神は信じないことなどあり得ないようなやり方で強要することはされない。人の自由意志を尊重して自分を示されます。

これは信じることのダイナミクスと関係しています。そのダイナミクスは、私たちの自由を生かしながら神へと導くプロセスです。神は、人の尊厳が尊重され、自由と愛を育むプロセスを通して信仰へとたどり着くように導かれます。

イエスは、人間の自由を尊重し、育み、何も押しつけない神のイメージを示しています。

イエスは、信じられるように助けることにとどめます。しるしは、真摯に神を求める人が神を見いだすことができるように与えられます。

神は、ある意味で感覚や意識に隠されたもので、信仰に行き着くにはさまざまなプロセスを経ています。神はあらゆる方法を通して私たちと関わろうとされますが、私たちの自由をどこまでも大切にされます。霊操はその手助けの1つです。

3) 使命（ミッション）を与えるイエス

イエスは自分の姿を現すだけでなく、私たちにミッションを与えています。復活した主からミッションを与えられるということは、大きな慰めです。

復活したイエスは「私はここにいる。私はよみがえった。喜びなさい。」と言うだけではありません。

「全世界に行って宣教し、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。（あなたの使命を果たしなさい。）」（マルコ 16：15 他）と言われます。

この使命感が非常に大切です。私たちが成長するのは、知識を増やすからだけでなく、使命を与えられるからです。

私たちはいくつになっても、「神はどんな使命を今のわたしに与えておられるのだろう」と考えなくてはなりません。

私たちが元気に働ける時には、使命感を持つのは比較的簡単です。けれども、弱くなった時、病気や年をとった時には難しくなってきます。しかし、聖霊の恵みによって使命感が与えられます。元
気な時に、神のため、教会のため、人々のために人生を捧げていたのと同じように、自分の人生を捧げることができます。

イエスは、「人生のどんな時にも、あなたには、果たすべき使命がある。あなたの働きは、私にとって重要です。あなたは大切なことを成し遂げなくてはならない。私にはあなたが大切である。」
と言って私たちに慰めてくれます。

私たちは、イエスからの使命感を持てるように、無力感にとらわれないように、熱心に祈らなくてはなりません。自分はもはや役に立たないという思いは、とても大きな誘惑です。

イエスは、弟子たちに現れて、しっかりとした使命感を持たせます。私たちも、どんな状況でも使命が与えられて、それを果たすことで慰められます。

まとめ 霊操 第4週のポイント

- ・十字架にかけられ復活したイエスによって慰められること。
- ・復活したキリストの栄光と美しさを喜ぶこと。
- ・イエスの謙虚さを学ぶこと。
- ・私たちの自由を尊重してくださっていることに気づくこと。
- ・自分も他人を慰めることができる力を願うこと。特に、自分の人生には意味がないと考えている人を慰められるように恵みを願うこと。

父の体験

3月に90歳を迎えた父が神様とはどのような方か教えてくれました

ゆるす神（放蕩息子を迎える神）

「イエズス会に入りたい、カトリックの司祭になりたい」と父に打ち明けた時の、父の衝撃は相当なものでした。四ツ谷のイエズス会の管区本部に、断りに行こうとしたくらいでした。

「息子が一人しかいない。それは勘弁してほしい。」

「自分の息子でなければ、こんな理不尽な話を認められない。」

でも、息子が願う道ならば、と許してくれました。

同時に、「修道会に入っても、違うと思ったら、いつでも戻ってこい。これがお前のうちだから」

と畳を叩きながら送り出してくれました。2000 年の 3 月のことでした。

ショックを与える神（日本で働く司祭としての課題を与えてくれました）

- ・宗教は社会を変えてないじゃないか？
- ・家庭を持ってボランティアの方が立派じゃないか？
- ・教会の中にとどまってはいけない。社会に貢献して認められることをしないと、という意識を持つようになりました。

・山口からの東北ボランティア（計 21 回で延べ 198 人の学生・幼稚園の先生・信徒が参加）、難民支援（幼稚園でのクリスマス募金）。園長としての働き方。

十字架上のイエス様

だんだん弱っている父に、「（司祭になる）進みたい道を許してくれてありがとう。孫の顔を見せられなくてごめんなさい」とを伝えました。

父は、左手を上げて「いいよ」とジェスチャーで示してくれました。

最後のお見舞い

- ・お薬が効いてきて、呼びかけても反応がなくなっていた父でしたが、別れ際に「お父さんありがとう。お父さんありがとう。お父さんありがとう。」と呼び掛けると、むくっと体を起こして目を

少し開けてくれました。

「90 年間、本当にお疲れ様でした。神様がよく頑張りましたね、と労って天の国の特等席が用意されてるよ」と声をかけると「俺で入れるのか？」という表情を示してくれました。

私たちは、十字架のイエス様から、寛大さ、優しさ、善良さをいただいています。そして、復活のイエス様からも、続きをいただきます。

生きている時の肉声でなくなっても、寛大さ、優しさ、善良さが、心に刻まれています。目の前に思い出すことができます。心の中に、生きている。それが復活の喜びに繋がります。

振り返りの質問

Q. あなたにとって神様はどのような方ですか？ 神様から慰められた体験、自分が人を慰めた体験がありますか？

Q. どのようなミッションをいま神様が与えてくださっていると思いますか？

終わりの祈り

自分をささげる祈り（聖イグナチオ）

主よ、わたしの自由をあなたにささげます。わたしの記憶、知恵、意志をみな受け入れてください、わたしのものはすべて、あなたからのものです。今、すべてをあなたにささげ、み旨に委ねます。わたしに、あなたの愛と恵みを与えてください。わたしはそれだけで満たされます。それ以上、何も望みません。

参考文献

イエズス会黙想会 --- マルティナーニ枢機卿指導 ---

2000年発行 訳：松本紘一 編集・発行：イエズス会管区長